第３章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

1.チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ『ボッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が（公財）静岡県障害者スポーツ協会（以下、「県協会」）、筑波大学体育系齊藤まゆみ教授の協力や指導を得て 2019 年より実施している事業である。2019 年度にケーススタディーとして開始し、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で継続開催が危ぶまれたものの 12 の小学校を対象に実施でき、ボッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できた。しかし、開催校にボッチャ教材がないところが多く、その後の活動継続阻害要因の一つであることも調査から明らかになった。そこで、2021 年度より体験会後にボッチャ教材を 1 セット提供し、追跡調査を行うこととした。そして 2022 年度より“静岡県内の全ての小・中学校”に対象を拡大し、継続して事業を展開している。今年度は、指導員として車いすバスケットボール選手が参加するなど、障害のある人と児童生徒が直接交流するプログラムとして展開した。2019 年からの5年間で約 4,200 名の児童・生徒・教員に体験していただいた。

「チャレンジ！ユニ★スポ」実施にあたっては、関係各位の多大な協力を得て継続開催できた。開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げたい。

2.プログラムの特徴

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供（学習機会）、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成（学術的価値）を有するプログラムとしている。

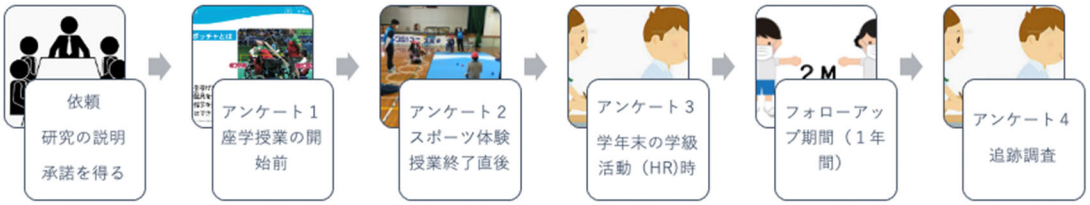
3.調査目的

今年度は、2022 年度までの調査研究において明らかとなったこととして、ユニスポ体験学習後であっても児童にとってボッチャは日常的に実施できる環境ではないこと、また「用具がない」「予算がない」「専門の知識がない」という教員のニーズがあることに着目し、「ボール提供の有無」と「その後の実施状況」について調査データをもとに検討した。次に、「学校規模」と「その後の実施状況」についても検討し、**「チャレンジ！ユニ★スポ」**体験学習内容が子どもたちの意識や行動変容に与える影響についての効果検証をすることとした。

4.調査方法

調査の手続きとして、各年度において、事前に参加校に説明と依頼をし、調査研究参加への承諾を得た。次に事前学習前の意識調査（アンケート 1）を実施した。事前調査実施後に各校において座学での授業を事前学習として実施した。その後ボッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査（アンケート 2）を行った。さらに、体験学習の数か月経過後に意識調査（アンケート3）を実施し、全体の傾向と学校別の分析とフィードバックを実施した。そして、追跡調査としての意識調査（アンケート4）を翌年度に実施した。なお、2021 年度開催校よりボッチャボール教材を体験会後に1セット提供した。

図表 3-1　調査の流れ



5.教材提供の有無による差異(調査1)

5-1.対象者

2019-2022 年度に「**チャレンジ！ユニ★スポ**」へ参加した 4 年生児童のうち、1 年経過後の追跡調査まで参加した 34 校の約 1,000 名を対象とした。また、教材提供のない 2019-2020 年度開催 12 校(約 300 名)と 2021-2022 年度開催 22 校(約 700 名)で比較した。

5-2.アンケート調査

アンケートは、「事前学習前(アンケート 1)」用、「体験会参加直後(アンケート 2)」用、「体験会から 2～3か月経過後(アンケート 3)」用、「1 年後(アンケート4)」用の4種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している(図表 3-2)。同一対象者へ期間中に4回の回答を依頼した(調査用紙は巻末資料参照)。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

・アンケートへの協力は強制でなく任意である。

・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっており、児童自身で設定する仕組みである。記入は児童の意思を尊重するが、可能な範囲で協力して欲しい。

図表 3-2 調査項目と実施時期

質問項目	事前	直後	数か月後	1 年後
障害のある人との距離感	○	○	○	
オリンピック・パラリンピックへの興味 (注)	○			
知っている障害者スポーツ種目	○			
ボッチャの感想		○		
障害イメージ	○	○	○	○
障害者スポーツイメージ	○	○	○	○
アダプテッドの考え方	○	○	○	○
アダプテッドの実践力	○	○	○	○

○は実施項目

(注)オリンピック・パラリンピックに対する興味は、2021 年度まで「東京 2020 大会」、2022 年度より「パリ 2024 大会」として尋ねている。

・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。
・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童からの質問が想定される。
例えば、「2つしか該当項目がない。全てが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。
その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで〇を」という回答を教師に依頼した。

5-3.事前学習

事前学習は、国際パラリンピック委員会の公認教材である「I' mPOSSIBLE（アイムポッシブル）」を指定した。内容は「パラリンピックってなんだろう」と「ボッチャをやってみよう（P13 までを座学で実施、P14 からを**チャレンジ！ユニ★スポ**で実施する）」の 2 項目で、スライド、ワークシート、動画「リオ 2016 パラリンピックダイジェスト（3 分 34 秒）」と「ボッチャをやってみよう（5 分 10 秒）」を提供し、実施を依頼した。

5-4.結果の概要

期間中に実施した4回のアンケートから、回答者コードで紐づけられた 1046 組のデータを分析対象とした。得られたデータはアダプテッド・センシティブ尺度（齊藤ら,2021）を用いてスコア化したのち比較検討した。

図表 3-3　教材提供の有無と時期別の評価スコア一覧

	平均点±SD						
	事前学習前	体験直後		数ヶ月後		1年後	
1：Q5_障害イメージ							
全体（1046）	0.53±0.81	0.78±0.91		0.75±0.90		0.79±0.93	
教材提供なし（334）	0.48±0.76	0.63±0.86	] *	0.66±0.84	] *	0.87±0.96	
教材提供あり（712）	0.56±0.83	0.86±0.92		0.79±0.92		0.75±0.92	
2：Q6_障害者スポーツ							
全体（1043）	1.38±0.77	1.64±0.69		1.56±0.74		1.59±0.70	
教材提供なし（334）	1.34±0.77	1.57±0.74	] *	1.53±0.74		1.65±0.72	
教材提供あり（709）	1.41±0.77	1.68±0.65		1.57±0.74		1.57±0.69	
3：Q7_アダプテッドの考え方							
全体（1043）	1.42±0.66	1.49±0.68		1.58±0.68		1.57±0.70	
教材提供なし（334）	1.40±0.64	1.44±0.68		1.52±0.68	] *	1.58±0.75	
教材提供あり（709）	1.43±0.67	1.52±0.68		1.61±0.68		1.57±0.67	
4：Q8_アダプテッドの実践力							
全体（1035）	2.30±0.70	2.43±0.69		2.55±0.66		2.67±0.59	
教材提供なし（331）	2.27±0.73	2.46±0.71		2.53±0.67		2.73±0.53	] *
教材提供あり（704）	2.31±0.68	2.42±0.68		2.55±0.66		2.64±0.61	

5-4-1.障害イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、全体の傾向として事前学習前（0.53±0.81）に比べ体験直後（0.78±0.91）にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後（0.75±0.90）、1 年後（0.79±0.93）まで継続することが示された（図表 3-3）。本調査対象児童の多くは、学校内に特別支援学級があったとしても、日頃から障害者との深い交流があるわけではない。そのため身近な存在として障害をイメージする機会を持っていない（齊藤ら,2022）ことが示されている。そのことから、**チャレンジ！ユニ★スポ**は、スポーツを通して児童に「障害」とは何かを考える契機を与えたと考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに着目すると、数か月後では教材提供ありのほうがスコアは高いものの、1 年後にはその差はなくなっていることが示された。これは、体験直後のスコアが教材提供ありの児童において突出して高く、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験に強く影響を受けたことが推察される。その後は緩やかにスコアは下がるものの、1 年後においても事前学習前よりも有意に高く保たれていることから、体験でのインパクトが強かったとも考えられる。

5-4-2.障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前（1.38±0.77）に比べ体験会直後（1.64±0.69）にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後（1.64±0.74）、1 年後（1.59±0.70）まで継続することが示された（図表 3-3）。座学だけでなく、**チャレンジ！ユニ★スポ**で実際にスポーツを通して体験することで「スポーツとしての気づき」が得られたことが、ポジティブな意識変容に影響したと考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに

着目したところ差は認められなかった。

5-4-3.アダプテッドの考え方

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より 3 つを選択してもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前（1.42±0.66）、体験会直後（1.49±0.68）、数か月後（1.58±0.68）、1 年後（1.57±0.70）と高くなることが示された（図表 3-3）。

スコアの詳細をみていくと、専門の道具や場所を必要としつつもサポートする意識が醸成されていくこと、その際の相談先を本や専門性を有する他者とするか、自分の中で解決していこうと行動するかで回答が分かれることも示唆された。**チャレンジ！ユニ★スポ**は、いわゆる「出前講座」の様式であることから、「外から来る専門の先生が特別に教えてくれる機会」と捉えている児童も多く、日常的なものになっていくには、「日頃から指導してくれる学校内の先生」による授業になっていくことが望まれる。その際の障壁の一つに指摘された用具のなさについては、教材の提供の有無での比較で検討した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに着目したところ、数か月後のスコアが教材提供あり（1.61±0.68）が提供なし（1.52±0.68）よりも有意に高いことが示されたが、1 年後では差がないことが示された。全体の傾向としては緩やかな増加・維持であるが、教材提供ありの数か月後のみ高いスコアが観察された背景については、スコア数値のみでは説明ができないため、別途実施するヒアリングによる実態調査結果と合わせて考察していきたい。

5-4-4.アダプテッドの実践力

障害のある友だちとスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらう、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすにのって車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらう、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から 3 つを選んでもらい、事前学習前、体験直後、数か月後、1 年後の 4 回での変化をみた。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高いほうから 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前（2.30±0.70）、体験会直後（2.43±0.69）、数か月後（2.55±0.66）、1 年後（2.67±0.59）と高くなることが示された（図表 3-3）。**チャレンジ！ユニ★スポ**体験内容は、単にボッチャを体験させるのではなく、具体的な障害を提示しながら児童に考えさせることや審判も含めた実践などが含まれていることが意識変容の背景にあると考えられる。

次に、教材の提供の有無で比較した。教材提供の影響として数か月後と 1 年後のスコアに着目したところ、数か月後では差がないものの、1 年後には教材提供なしのほうがスコアは高くなっていることが示された。しかしながらどちらの群においてもスコアは漸増パターンを示しており、ボッチャに限定されない多様なアダプテッドの実践力として児童の学びが継続されているものと考えられる。

これらの結果から、教材提供の有無に関わらず、一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、障害のある友達とスポーツをするために自ら主体的に関わっていこうとする意識の醸成や必要な場面でアダプテッドを適用しようとする意識があることも明らかとなった。また、その意識は 1 年後も継続していることが示された。以上のことから、**チャレンジ！ユニ★スポ**によるユニバーサル・スポーツを教材とした体験会を軸とする教育内容は、児童生徒の意識変化に影響すると考えられた。

6.学校規模による差異(調査2)

教材提供の有無による比較では、アダプテッド・センシティブ尺度で評価される 4 項目(障害イメージ、障害者スポーツイメージ、アダプテッドの考え方、アダプテッドの実践力)全てにおいて、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験前よりも体験後のほうが高い状況が継続することが示された。しかし、ボッチャ教材提供の有無が反映すると考えられる4回目調査での評価では、差が認められなかった。つまり、学校に用具があるかどうかよりも、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験において、ボッチャを体験したことが児童の意識変容の契機になったと考えられる。

そこで、教材提供を行った 2021 年度と 2022 年度の参加校を対象とし、教材の適正配置数、活用方法や学校における教育方針等との関連を検討するために、参加校の学校規模を当該学年において 50 名 2 学級以下(以下、小規模とする)とそれ以上(以下、中規模以上とする)の2群に分けて検討した。

6-1.対象者

2021 年度と 2022 年度に**チャレンジ！ユニ★スポ**へ参加した当時 4 年生児童のうち、1 年経過後の追跡調査まで参加した 17 校の回答者コードで紐づけられた 712 組のデータを分析対象とした。内訳は小規模 8 校(n=154)、中規模以上 9 校(n=558)である。

6-2.学校規模とその後の活動実施状況

学校規模とその後の活動実施状況を図表 3-4 に示した。小規模では 8 校全てにおいて、**チャレンジ！ユニ★スポ**体験後にもユニバーサルスポーツとしてボッチャ等の活動が実施されていた。一方で、中規模以上では、実施有が 5 校(n=370、66.3%)、未実施が 4 校(n=188、33.7%)であり、児童の3人に 1 人は未実施という結果であった。このことから、学校規模はその後の活動実施に影響があると考えらえる。このことは、教師から提示された課題や問題点にある「1クラス3～4セット欲しい」「道具が揃わないのが課題、実施してみると児童の反応がいいので、より多くの児童が体験できるようにしたい」「道具が複数あると子どもたちも興味を示すと思う」というコメントにも反映されている。しかし、「用具がなければできな

図表 3-4 学校規模別でみたその後の活動実施状況

	実施(n=524)	未実施 (n=188)
小規模 (n=154)	8校 (n=154)	0
中規模以上 (n=558)	5校 (n=370)	4校 (n=188)

い」というだけでは現状に留まってしまうことから、**チャレンジ！ユニ★スポ**では用具を手作りする方法なども併せて提示し、「・・・だからできないのではなく、工夫すればできる」ということも体験的に学ばせる良い機会だと捉えていた。この点については2つの解釈があり、安全性の確保という視点でどこまで手作りで良いのかというリスクマネジメントの観点から正規の用具で実施する必要性に拘るべきというものと、手作りをする手間・時間などを考えると実施を躊躇するという教員の多忙な実態という社会的課題も背景にあることがうかがえた。

6-3.学校規模と意識変容

教材提供の有無で児童の意識変容に差がないことから、学校規模と時期別の評価スコアを比較した（図表 3-5）。

図表 3-5 学校規模と時期別の評価スコア一覧

	平均点±SD				
	事前学習前	体験直後	数ヶ月後	1 年後	
1：Q5_障害イメージ					
全体（712）	0.56±0.83	0.86±0.92	0.79±0.92	0.75±0.92	
大規模（558）	0.56±0.83	0.88±0.92	0.79±0.92	0.74±0.91	
小規模（154）	0.58±0.82	0.76±0.92	0.79±0.93	0.77±0.95	
2：Q6_障害者スポーツ					
全体（709）	1.41±0.77	1.68±0.65	1.57±0.74	1.57±0.69	
大規模（557）	1.39±0.77	1.66±0.65	1.56±0.75	1.53±0.71	] *
小規模（152）	1.47±0.75	1.72±0.66	1.62±0.72	1.72±0.57	
3：Q7_アダプテッドの考え方					
全体（709）	1.43±0.67	1.52±0.68	1.61±0.68	1.57±0.67	
大規模（555）	1.42±0.68	1.50±0.69	1.58±0.67] *	1.53±0.66	] *
小規模（154）	1.48±0.66	1.56±0.64	1.74±0.71	1.71±0.70	
4：Q8_アダプテッドの実践力					
全体（704）	2.31±0.68	2.42±0.68	2.55±0.66	2.64±0.61	
大規模（551）	2.32±0.67	2.39±0.68] *	2.53±0.67	2.63±0.63	
小規模（153）	2.28±0.70	2.52±0.64	2.63±0.59	2.69±0.53	

全体傾向としては、どのスコアも事前学習前よりも 1 年後は高くなっていることから、学校規模に関わらず、**チャレンジ！ユニ★スポ**が児童の意識変容に影響を与えていることが示されている。1 年後の調査において学校規模による有意な差が認められたのは、障害者スポーツイメージとアダプテッドの考え方であった。障害者スポーツイメージは、小規模校が 1.72±0.57 であるのに対し中規模以上では 1.53±0.71 であった。また、アダプテッドの考え方は、小規模校が 1.71±0.70 であるのに対し中規模以上では 1.53±0.66 と、いずれも小規模校のほうが、中規模以上よりも有意に高い値を示した。どちらも体験会直後は差がな

いことからその後の体験の有無が興味関心と関連していることが推察される。特に、小規模校ではその後もユニバーサルスポーツとしてボッチャをはじめとする体験活動が実施されていたのに対し、中規模以上では児童の3人に 1 人は未実施という結果であったことから、学校規模はその後の活動実施に影響しており、体験的に学ぶことから生じる障害者スポーツイメージやアダプテッドの考え方に差が生じたのではないだろうか。

用具の適正配置については、通常学級において 1 学級に1セットのみの教材では不十分であることも示された。児童数あたりの適切な教材配置数としては、授業で行う場合はクラスに3～4セット(10 人あたり1セット)、レクリエーション等で随時活用されるためには、使用可能な状態で目につくところに用具が置かれていることが必要であることが現場から示された。教材や用具を揃えるという点では、地域連携や拠点形成で用具を融通し合うなどの、選択と集中スタイルが有効であろう。その場合は県協会や地域のスポーツ協会などが拠点(西浦,2024)となっていくことで計画的な配備が可能になる。

小規模で学年1クラスの場合は、カリキュラムの柔軟な運用で比較的新しいことに取り組みやすい現状も示された。これは小林(2023)の研究結果でも同様の指摘があり、小規模校のほうが実施への阻害要因が少ない。

7.追跡調査

チャレンジ！ユニ★スポを開催して1年経過後の状況をつかむことを目的に、2021 年に開催した4校（小規模 2 校、中規模以上2校）を訪問し、ご担当の先生からお話を伺った。

7-1.その後のボッチャ体験の実施状況について

多くの学校で、体験会後「機会があればまたやりたい」という児童が多かったのを受けて、学校での空き時間や昼休みを活用して、また地域と連携したイベントの場で実施されていた。但し、コロナ禍の影響や授業時間の余裕のなさから、実施回数については限られたものとなり、日常的にやれる状態には至っていない。

・この地域は過疎化が進んでおり、公立小中一貫教育構想を考えている。文化が違う学校が一つになるためにも交流を深めていこうという段階である。いきなり授業となるとハードルが高いので、行事から進めている（自然教室→探村交流→総合的学習の発表など）。 この一環として、2小学校、1中学校で合同の地域交流会を開催した際、プログラムの一つとしてボッチャ体験コーナーを取り入れた。**チャレンジ！ユニ★スポ**開催小学校の5年生（体験会時4年生）と、他校 5 年生がボッチャ体験のお手伝いをしながら、同時に5年生同士の交流を行った。
・年度が変わり小学 1 年生の担任となった。最初は 1 時間席に座っているのも難しい年齢のため、教室内でボッチャを活用した。正式なルールではなく、「ボッチャ遊び」のような感じで行ったが、1 年生でもわかりやすいため、意欲的に取り組めた。ルールが簡単、誰でもできるため、学年を選ばずにできる。
・**チャレンジ！ユニ★スポ**開催後、子どもたちからは「やってよかった」、「もっとやりたい」という声があり、クラスごとに時間をとってボッチャ体験を実施した。
・月に3回ほどある、昼休みの延長の時間 「学級遊び」の時間で3～4回実施した。コロナ禍で場所がなかったので、教室内での実施となった。
・ボッチャボールセットをもらったこともあり、コロナ禍のため昼休みに外遊びができない日に、ボッチャを実施した。
・いただいたボッチャボール1セットについて、「ぜひ積極的に使ってください」と他の先生方に案内した。特別支援学級の先生は特に興味を持ってくれ、使っていただいている。
・ボッチャは準備もほとんど必要ないので、学校に教材があればちょっとした空き時間や雨の日の昼休み時などにやっている。
・2022 年に職員の夏休みのレクリエーションでも活用した。20 名ほどで実施したがほとんどが初めての体験であった。先生方からはボッチャは練習不要で、誰でも勝てる可能性があるので、とても楽しかった、という感想をもらった。
・同世代の職員に個別に声がけをして広めるようにしていると、子どもたちも「それ何？」と興

味を持ってくれた。
・ボッチャ以外にはその後パラスポーツは体験していない。

7-2.その後の子どもたちの変化について

ほとんどの学校が、総合学習の福祉の時間で開催したこともあり、その後パラスポーツや障害に関しての投げかけに対して多くの気づきや理解、前向きな発言や行動がみられた。

・4年の福祉の学習でのボッチャ体験を通してパラスポーツへの興味をとても持ったようで、冬季の北京パラリンピックもかなり興味を持って見たように思う。
・東京オリパラが終わって学校側としての取り組みも少し落ち着いていた感じがする。一方、**チャレンジ！ユニ★スポ**後、パラスポーツについていろいろと自分で調べた児童はいた。
・北京パラ開催前に、余ったはがきでパラ選手に応援メッセージを出すことを提案したら、良いね！と自然と前のめりに取り組む子がほとんどであった。その姿を見ると、障害者スポーツへの理解、共生社会への理解や応援したいという気持ちは、1 年間の福祉学習の中で、この体験をしていなければなかったと思う。
・意外と身近なところに障害のある方がいるということがわかり、また、お年寄り、小さな子供たちでも、できることできないことがあるという気づきがあった。例えば、おばあちゃんに優しくしよう、とか、地域で困っているお年寄りがいれば声かけようかな・・とかいう声が聞かれた。4 年生にとってこれらを知ることができたことは大きい。
・イベントとして開催し指導員に来てもらったことは、子どもたちの印象に残り意欲も高まったと感じた。教員がやると、普段の授業の延長という感じになってしまう。**チャレンジ！ユニ★スポ**がきっかけづくりになり、その後の学びにつながった。その後の福祉の授業では、いろんな方がいるんだということがわかり、どうなったら住みやすいかを話し合って発表を行った。この町は坂が多いからスロープが必要とか、ボタンが押せない人がいるので低めの自動販売機があるといいね、などの気づきがあった。
・もともと優しい子が多く、不登校の子が学校に来た時もとても優しいが、より一層優しいなと感じるようになった。
・特別支援学級の児童との交流はもともと多くはない。特別支援学級の児童との関わりには、個人的には特に大きな変化はないように思う。
・普段の体育と違い、スタートラインが一緒のため取り組みやすい。運動が不得意な子など、普段の体育では認められにくい子も、認められる機会となり自己肯定感が高まる。

7-3.教材の準備・保管について

どの学校も教材が十分に揃っているとは言えず、実施にあたっては 1 クラスあたり3セットほどが必要という意見が多い。貸し出しのシステムの要望もあった。また教材の保管場所に

ついても、児童が使いやすい場所での保管の必要性が指摘された。

・イベント開催にあたり、6 セットを用意した（もともとあった：1、YMFS から：1、オリパラ関係で指定を受け購入：3、年度予算で購入：1）。
・合計3セットあるので学級遊びなどで使っている（学校にあった：1、廃校になった学校から：1、YMFS から：1）。
・クラスで1～2セットだけだと「待ち」の時間が多くなってしまうのでやりにくい。子どもたちは、たくさん投げたいので投げる機会を多くしてあげたい。
・道具の数と場所が揃わないと難しい。35 人学級だと、3～4セット欲しい。1 人 1 球持てる感じ。持てると嬉しいし安心できる様子である。
・1 人 1 球投げたとして、1 学級 3 セットくらいあると、使いやすい。一定の期間置いておくと、職員も子どもたちも興味（気になる）を持ってくれると思う。
・1 クラス 1 セットずつあり、さらに声がけをしてくれる教員もいれば取り組みやすい。道具があっても、教員が知らなければ活用しないと思う。教員に知ってもらうことが大事。
・ボールの貸し出しシステムがあればありがたい。欲しい時に希望どおり、道具が借りられれば、自分たちで計画を立てて、活用できると思う。
・教材は、職員室の体育の備品を管理するところに保管し、担任の教員経由で貸し出ししている。子どもたちが職員室に自分で貸し出しを申し出るのは、ハードルが高いかもしれない。職員室よりは各教室にあるほうが、子どもたちも興味を持って使いやすいと思う。
・教材を 4 年生の教材室に保管したため、5 年生が使えない状態だった。来年は体育館等、皆が使えるところに置くよう、体育主任と会話している。
・特別支援学級の教室に1セット常に置いている。申し出れば、いつでも使える。

7-4.体験機会を増やすにあたっての課題

学校で継続して実施するためには、児童数に見合った教材の確保、総合学習に加えて体育などの時間でも実施できるようにすることが挙げられた。

・総合学習の時間で実施したが、体育の時間ではやっていない。体育も学習指導要領に則ってやっており、カリキュラムのどこで位置づけるか？になる。総合でやるのが多いのは、逆に学校でやるとしたら総合学習の時間しかできない。学習指導要領にボッチャが、スポーツと位置づけられればやれるようになる。現在は決められたカテゴリーの中でやらないといけないと思っているので、体育での実施は慎重にならざるを得ない。例えば、市教委で研修会などやってくれれば、授業として実施する敷居がぐっと下がると思う。
・授業の時間等が限られていて、自由な時間が取れない。体育の授業に組まれているわけでもなく、すでに組まれているカリキュラムもきつきつなので、もう少し余裕があれば実施できるのに、と感じている。

・1,000 人規模の学校ゆえ、人数の多い学校の場合は道具の数が揃わないと、継続して活用するのは難しい。
・教材の購入について、管理職が興味を持つと「購入してみたらどうか」ということになるが、年間の予算の中で事務員と確認し、校長・教頭に許可を得てようやく購入することになる。体育と情報関係の予算は一緒だったりするため、どの部分にどれだけ予算をさけるか、なかなか難しい。
・4年生では総合学習の時間で実施したため、5年生ではテーマが変わりボッチャ体験も残念ながらそれきりになってしまった。時間を取るのが難しい。

7-5.今後の展開にあたって

まず教員が楽しさや効果を知ることが重要であり、その機会（研修など）をつくることは児童が学習する機会の増加につながる。先生がリードすれば児童はついてくる。

・ボッチャをやったことがない教員は多い。体験すると皆さん、その面白さや活用方法がわかる。まずは教員に知ってもらうことが大事。
・教員向けの研修があると良い。既存の研修会や、教職員体育大会で、道具があれば取り入れることはできるかもしれない。教員自身が楽しさをわかれば子どもたちに体験させてみたいと思うであろう。
・地域で実施する体育の担当の教員が集まる実技研修会があるので、そこでボッチャを紹介することで広まる可能性はあると思う。
・まず道具があること、そして何よりも「やるよ！」という音頭を取る人がいないと道具があっても使わないので、先生方に知ってもらうということが重要。先生が旗を振ると児童が素直についてくる。
・物とアイデアをパッケージにして学校に提供し教員に実施してもらうことも、選択肢としてはあるかもしれない。
・普段の授業を抜けて、他校の**チャレンジ！ユニ★スポ**体験会の見学に行ってやり方を学ぶというのは難しい。

8.まとめ

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠であった。事前学習では、教師が配布された教材をもとに展開することから教師の教材観や扱い方も重要な要素である。1年後の追跡調査からは、継続して実施することで児童の障害イメージや障害者スポーツのポジティブイメージが醸成されることが示されたが、体育やスポーツ場面におけるアダプテッドへの意識や実践力については、差がないことも示された。**チャレンジ！ユニ★スポ**は、多くの小学校では総合的な学習の時間の福祉単元として実施されていることから、単発的な扱いにならざるを得ない。アダプテッドの意識が定着するためには年間計画に組み込まれていくことが必要（齊藤ら,2022）であり、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

2019 年度から 2021 年度までの調査において、常に用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因として示されたことから、体験会後に当該校へ用具を提供し、その後の活用状況についても調査してきた。しかしながら、単に用具を提供するだけでは効果がなく、学校規模に応じた用具の準備が必要であることも示された。この課題に対しては、所轄する教育委員会や地域単位、もしくは県協会が拠点となって学校や福祉施設等への用具の貸し出しができるシステム構築が有効であると考えられる。その時には教育と福祉という行政の壁を越えて有機的なつながりを持つことが費用対効果の面でも有効であろう。

2019 年度から継続してきた本調査からは、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。**チャレンジ！ユニ★スポ**開始当初は、指導者も試行錯誤でスタートしたが、教材提供を開始した 2021 年度になると、指導者の経験も豊富となり、体験内容も単にボッチャを体験させるのではなく、具体的な障害を提示しながら児童に考えさせる内容や審判も含めた実践などが定着してきたことも背景にあると考えられる。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会にお礼申し上げます。

文献

小林裕季（2023）：高等学校体育教師が生徒のニーズに応じた指導実践に至るまでのプロセス―質的分析をもとに―，日本体育・スポーツ・健康学会第 73 回大会.

西浦謙太（2024）：中学校体育におけるアダプテッド・スポーツ導入の障壁について―ボッチャを用いてー,令和 5 年度筑波大学体育専門学群卒業論文.

齊藤まゆみ,澤江幸則,齊藤仁人,松原豊（2021）：障害者スポーツ関連授業効果尺度の開発 1，日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会.

齊藤まゆみ,澤江幸則,齊藤仁人,松原豊（2022）：ボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識に及ぼす影響.筑波大学体育系紀要,45,25-31.

（齊藤まゆみ）